

記念記事

東京秋工会75周年

東京秋工会関与30年目、
これまでに振り返りつつ……

● はじめに

東京秋工会75周年。その記念的な記事の担当を仰せつかり、まずは当会の歩み的なことに触れてみたいと考えたが、会報「金砂」創刊以前において、当会の沿革的なことを伺い知ることが出来る会としての公的資料というものは残念ながらまったくといってない。

当会が周年という区切りを初めて明確に打ち出したのは、5年前の70周年。その折の「金砂」18号に、前幹事長の小野 鐵雄さん(S38C/現監事)が「東京秋工会70年の歩み」と題した記念記事を書かれているが、その内容の多くは同窓会本部等発行の会報や事業報告などに垣間見える当会関連の記事を拾い集めたもので、記事としてまとめるにあたってのご苦労が強く思われるものだった。

これに少しでも肉付けできないものかと、自分の出来る範囲での調べはしたつもりだが、なかなか小野さんが書かれた以上の沿革的事実を見出すことが出来ない。それで少し視点を変えることにし、沿革的なことはともあれ、当会総会初参加以来30年目となる私がこれまで耳にしたことや見てきたこと、それに敬愛する当会大先輩からお聞きしたお話などを交えて記念記事としてまとめさせていただくことにした。

多少個人的偏りがあるかもしれないがその辺はご容赦いただきたい。

● 会報「金砂」創刊以前のこと

現在の東京秋工会では、10～20年前のことであれば会報「金砂」のバックナンバー(ホームページにも掲載)を見れば会で何があったかなどが容易に分かる。「金砂」には将来的に会の歴史的資料となる役割が多分にあるのだということを改めて思っている。

そういう意味もあって、東京秋工会のこれまでに振り返るにあたっては、「金砂」創刊以前と創刊以後に分けて捉えてみることにした。まずは「金砂」創刊以前。

私が初めて案内をいただき、東京秋工会総会(その時の会場は東京駅近くの丸の内ホテル)に出席したのは昭和61年、31才の時だった。正直その時のことはあまり印象に残っていないが、その年の総会が、前々会長 谷藤 正三氏(S12M)の在任最後であったことを後に知った。

同期や年の近い先輩と会えることがなかったせいか、翌年も案内が届いたが、どうしようか迷いつつ、会場が東京プリンスに変わったことにちょっと興味を覚え、行ってみることにした。

この年(昭和62年)は、前会長の澤木 誠一さん(S26E/現名誉会長)が会長に就任された年だった。それ以前の総会は前年の1回しか経験はないが、何となく雰囲気が変わったような印象を受けた。それと、長年紅一点でがんばってくれている 染谷 厚子さん(S47K)や現幹事の下總 勉さん(S47A)といった一つ違いの年の近い先輩にお会いできたことが何かとても嬉しく思えたのを覚えている。

その時の総会后、とある先輩から推薦され、わけもよく飲めないまま幹事の一人となることになった。

幹事になって3年ほどが過ぎた幹事会後の飲み会の席。当時、会の台所状況は火の車で、何か活性化に役立つ良いアイデアはないか、という話になった。飲み会の席ということもあり、色々勝手なことを言わせていただいたが、結局その時に出た、会報を作る、というのと、同好会(この時はゴルフのみ)を作る、というのが決まったのだった。併せて、それまで1,000円だった年会費(今考えるとよくこれで…と思う)を翌年から3,000円にするということに決まったのもこの時だった。

ゴルフ同好会はこの話の翌年(平成3年)秋に第1回が行われた。会報「金砂」は少し遅れて、平成5年の創刊。

私が実際に知る「金砂」創刊以前といえば、この7年ほどである。もっと以前のことをと考えると、懇意にさせていただいている大先輩のお話を聞きに行くことにした。

私が敬愛する大先輩の一人、3代前の幹事長で谷藤前々会長の時代の幹事長でもあった 齋藤 右二郎(ゆうじろう)さん(S26M/現顧問)のお話をと、連絡を取り、ご自宅のある烏山へ伺った。



齋藤 右二郎さん (H27.6.15)

近年は何かと病院との行き来が多いという齋藤さん。この日の体調は悪くないとのことだったが、私が少し遠慮気味になってしまったせいでの日はとりとめの話に終始してしましたが、その10日後齋藤さんからお手紙と資料が送られて来た。

手紙には、昭和15年に東京市(旧)の水道メーターを作っていた 平野井 雷治さん(S3M)が中心になって同窓会を作ったこと、戦中・戦後のことは不明だが、昭和31～32年頃バラバラに開かれていた(各科)同級会をまとめ後楽園飯店で同窓会を開催(同級生の鎌田さんから聞き、その2年後に誘われたことあり)、その後齋藤さんが会長となり同窓会を新しく(再編)し名簿も作った(完全なものではなかったが)、というようなことが書かれていた。昭和15年に平野井さんが初代会長となって設立されたことは周知だが、東京市(旧)の水道メーターを作っていた方だったことなどは初耳だった。何か齋藤さんらしい…という気がした。また何か思い出したら連絡いただけるとのこと。

同封の資料は、昭和63年発行の東京秋工会の名簿(印刷したもの)だった。これには覚えがあったが、私ののは紛失してしまった。名簿の中には会員動向の手書きメモがたくさん記されていた。

齋藤さんには年に何回か連絡を取ってご様子を伺っているが、また機会を見つけてお会いしにいくつもりだ。お元気でいてほしい。

昨年、懇意にさせていただいていた、浦井 宗治さん(S12M)の忌報に接した。お元気でご存命であれば、ひょっとしたら昔の東京秋工会のことが聞けたのではと思った。より昔の東京秋工会を知りたいのであれば、もっと早い時期に気がつくべきだった…と今さらながらに悔やまれる。

● 会報「金砂」創刊以後

先に記したように、会報「金砂」と同好会(ゴルフ)は同時期に企画され、ゴルフ同好会が先にスタートした。

この記事を書くにあたって古い資料を物色してみた中に第1回ゴルフ会の写真があった。

私も参加した第1回ゴルフ会。今は亡き先輩の顔があったりと、懐かしくも淋しくも思える1枚だ。

ゴルフ同好会は現会長の三平 俊悦さん(S39A)が提案者であり、現在も何かと開催の労を取っている。

私も当初は、三平さんのお手伝いに回り、手前味噌な言い方をすれば、かなり開催のために協力した。ただ、元々それほど強いゴルフ好きでなかった(上手いわけでもなく)ことや、平日開催であることに参加の無理があって、第10回を最後に、退かせていただいた。ただ、下手は下手なりに存分に楽しませていただいたのは確かだ。長く続くことを願う。

さて会報。平成5年に創刊され今年23号となる。正直言えば今のようなものになるとは、言い出しっぺでありながら想像もしていなかった。



第1回ゴルフ会参加メンバー写真

創刊以前の東京秋工会52年間に比べれば、会報創刊後の23年は半分にも満たないが、会報の創刊後に様々な企画され行われてきた各同好会や総会他での諸活動を考えて、その内容においてかなり濃密な23年間であるといえるように思うのは私だけだろうか…?

創刊後の23年をここで改めて振り返る必要はないだろう。なぜならホームページにも掲載されている「金砂」のバックナンバーを見れば、一目瞭然だから。

これだけは書いておかなければということがあった。それは会報の発行を支えてくれている、賛助広告にご協力いただいている方々の存在だ。特に完成度もろくすっぽなものではなかった創刊～9号の頃からご協力いただいていた方々には、制作担当の者として頭が下がる思いでいっぱい。もちろん感謝の気持ちはご協力いただいている方全てに送りたいが、本記事では、10年以上(14号以前から)続けてご協力いただいている8社の皆さんを紹介させていただくことにした。(現役員除く)

………… 長年のご協力に感謝いたします ……………

澤木 萬國特許事務所 所長 井理士 澤木 誠一 (昭和26年電気科卒)	創刊号から本号まで23回継続でご協力いただいています。
株式会社 北勢工業 代表取締役社長 太田 博之 (昭和56年工業化学科卒)	※同窓会本部前会長 故 太田 光重氏(S31M)が設立された会社 第4号から本号まで20回継続でご協力いただいています。
株式会社 汎建築設計事務所 代表取締役 鈴木 誠一 (昭和38年建築科卒)	第4号から本号まで20回継続でご協力いただいています。
鎌田工業 株式会社 代表取締役社長 鎌田 満雄 (昭和27年土木科卒)	第7号から本号まで17回継続でご協力いただいています。
株式会社 アドテクノ 取締役 佐々木 武 (昭和29年機械科卒)	第7号から本号まで17回継続でご協力いただいています。
伊藤貴金属店 代表取締役 赤塚 京二 (昭和40年土木科卒)	第8号から本号まで16回継続でご協力いただいています。
株式会社 渡辺佐文建築設計事務所 代表取締役 渡辺 佐文 (昭和25年建築科卒)	第10号から本号まで14回継続でご協力いただいています。
アイシン産業株式会社 代表取締役会長 宮川 良一 (昭和34年機械科卒)	第14号から本号まで10回継続でご協力いただいています。

お詫び・3社の代表の方よりこの紙面に向けたコメントをいただきましたが、紙面構成の都合で割愛させていただきました。ご容赦いただきますとともに、お詫び申し上げます。

● 終わりに

若い世代がなかなか会に参加してくれないのは他校同窓会でも大きな悩みとされている。ただ思うに、遠く首都圏の地で母校や故郷を思う気持ちを持った若い同窓がいる限り、同窓会が無くなるといった心配はないのだろう。

次の80周年、そしてさらに先の100周年へ向け、若い世代にいつでもバトンタッチできる東京秋工会にしておくことが、我々の今最も重要な任務かもしれない。

◆ 記事

松木 一美 (昭和48年機械科卒)
東京秋工会 副幹事長

特集

戦後70年
秋田工業を巡る
終戦前後

加賀谷 健治 (昭和36年電気科卒)

東京秋工会 副会長

1. まえがき

私は2002年発行の 会報KANASA VOL.10 から編集に携わってきしたが、これまでの掲載記事の中で終戦前後の事柄で十分理解できないままの次の3点がある。

- ・秋田市立商業学校との関わり
- ・秋田工業に5年も6年も在籍した理由
- ・秋田日満工業学校のこと

今年終戦70年にあたり、真相を解明し記録に留めることにした。

2. 秋田市立商業学校との関わり

1) 秋田での取材旅行

秋田商業と秋田工業の関わりに関しては、KANASAVol.18 に当時の秋商東京雄水会会長 和田 武男氏 の投稿記事が掲載されている。その中では昭和19年度に秋田市立商業学校が秋田市立工業学校に転換した。終戦に伴い昭和21年秋田市立商業学校が復活し、秋田市立工業学校が廃校になり全生徒が県立秋田工業に編入した、と記載されている。

一方、秋工百年史の「秋田県立秋田工業高等学校学科変遷図」では工業化学科が昭和20年4月1日秋田工業高校(秋田工業学校の誤り)へ移管、と記されているが、移管時期に1年の違いがある。

この件に関し 和田 武男氏 が「真相究明」のため、秋田商業の歴史をよく知っている「武藤 四郎氏」と秋田市立工業学校1回生の「伊藤 義太郎氏」から当時の話を聞くために秋田に行くことにし、私に同行のお誘いをしてきた。



和田 武男氏、加賀谷

会報KANASAの原稿作成のため良い機会と思い平成27年3月26日と27日の2日にわたり秋田で共同調査した。

2) 武藤 四郎氏の説明

武藤 四郎氏は元秋商教頭、北秋田市立合川高等学校長、生涯学習センター所長を歴任された方で、この度の説明のため資料を作成し、根拠となる参考資料も準備されており懇切丁寧な説明を受けた。



武藤 四郎氏

3) 伊藤 義太郎氏の説明

伊藤 義太郎氏は、昭和19年4月新設の秋田市立工業学校冶金科に入学し、翌年昭和20年4月県立秋田工業学校冶金科に編入した。ラグビー部に入部し、第27回全国中等学校ラグビー大会と第28回全国高校ラグビー大会で2回全国優勝した時にフォワードとして活躍した。昭和24年3月卒業後法務局に就職し、その後司法書士事務所を開設。

伊藤氏から、昭和19年4月市立秋田工業に入学した当時は校舎にいた



伊藤 義太郎氏